

7. 鹿狩り



馬渡島で鹿狩りが行われていたことは、島の人々にも伝説的にしか知られていない。しかし古老の話によると、水オケを運ぶ「カギ」はすべて二股の鹿の角を使用していたが、大正7年の大火事ですべてが焼失してしまったという。

現在、宮本地区に、当時の水くみ場の井戸が2カ所残っている。以前には、若者衆たちが年1回「鹿講」をやり、鹿大明神を祭っていたそうである。その日は御神酒に魚、野菜を供えて、昼から夜にかけ酒もりが行われ、伝承されてきた鹿の供養を行ってきたという。

馬渡島の鹿は明治以前にすでに絶滅しているのですが、この島の鹿狩りの情景はこの産物図考の第2帖でのみ知ることができます。一般にニホンジカは肩の高さが80~90センチであるが、この島の鹿は、地形と餌の関係で背丈が小さく、容易に捕え難いとされている。鹿狩りは狩衣をまとい馬上から鹿を射とめる情景が連想されるが、この島は険しい山谷が入りこんでいるために馬追いすることが出来ず「ウチ」(鹿の通り道)に勢子をまわして、犬を入れて追いこみ、待ち伏せして射止めるのである。

鹿の心臓は足の付脇より2すばかり腹によった所にあるので、そこにねらいを定めるのである。そうすると、

大方即死すると付説している。

また鹿が追いこまれて海に逃げこんだ場合、船で追いかけて生け捕りにしていたという。捕えた鹿は皮を取り肉は、鶯の餌に供していた。鹿の毛は、夏毛はクリ色で美しい白斑(星影)を有するが、冬毛は暗かっ色、無斑となる。そこで鹿の皮をとるのは、3月ごろが一番よく4月になると毛がのびすぎるきらいがあり、女鹿よりも男鹿が白斑が小さく数が多いのでよいとされている。

なお著作者、木崎依々軒は鹿笛についてもこまかく図示している。笛の膜(舌)は腹ごもりの皮が一番よく、また耳の中の皮もよいとしている。この鹿笛で鹿をおびき出していたのであろう。

また「さき鹿」について図示している。この鹿は角に枝がなく、男鹿、女鹿の中間の大きさで、毛深く飛騨、美濃、越前では「マメサシ」「牛鹿」といったとあるが、このような変種がこのに生息していたことをこの図考で知ることができる。

春になってダラの木の芽を食うと鹿の角が落ちるといわれている。遠い昔、島民はダラの木を追って、鹿の角を探していたのであろうか。この島の各地に、今なおダラの木が茂っているのである。



8. 鷹の雛とり



馬渡島で、タカが果をかける所は、大塩水浦と赤滝の2カ所であると著者は述べている。タカと俗称されるものにオオタカ、ハイタカ、クマタカ、アオタカ、トビ、ハヤブサ、サシバ、ミサゴなどがあるが、タカ狩りの用に使うものは、オオタカ、ハヤブサがよいといわれている。著作者、木崎放々軒は、実際にその場で写生したとは考えられないが、実に巧妙に巣からヒナをとっている様子を第2帖に図説している。タカ狩りの歴史は古く、西洋では西暦紀元前から知られ、日本でも仁徳天皇の時代に大陸から伝来し、年とともに盛んになったといわれる。そのタカ狩り用タカの飼育に当たった鷹甘部は、古くは主鷹司、放鷹司と時代によってその名は変わったが、タカ狩りは公家と武家の社会に連綿として伝わっている。江戸時代には、鷹匠の職制が出来、各藩の大名も競ってタカ狩り用タカの育成にあたり、タカ狩りは武将のたしなみの一つとなったのである。その鷹匠の住む地区を鷹匠小路とよび佐賀市内にも、この呼称は今日なお残っている。

第2帖の絵によると、ハシゴをいく段も結び、竹カゴを持って巣に近づき、めざすヒナをとって親タカを追い払いながら降りている。ヒナを入れたカゴは別にフタをして降している。親タカはヒナを取りにくる人に攻撃を加えている。この間の情景を詳細に描いているのである。ヒナは捕えられる時間によって、赤毛、巣タカ、果まわり、野されタカ、里落ちタカ、新玉タカなどの名で呼ばれる。また、同じ種類の果がまわりに多くあっても、果ごもりのタカは決して自分の果を間違わない。さすがは頭のよい名鳥といわれる。

この図の中に「鶴」の営巣があるのは面白い。さる昭和45年5月、馬渡島に「鶴」が営巣しているらしいとの情報が福岡、佐賀の有志ら約30人の調査団が訪島したことがある。当時のマスコミは「日本における営巣南限地」と注目したが、ついにその営巣、繁殖の証拠はつかめなかった。この調査の発端になったのもこの産物図考である。



9、焼物

肥前の陶磁器は唐津系の陶器と有田系の磁器に大別することができる。この第4帖に『焼物大概』の項があり、唐津焼の由来と製作工程が図説されている。

それによると唐津焼の起源は秀吉が高麗から太郎冠者、小次郎官者、藤平官者を召し連れ、唐津松浦郡北方佐志山の内で焼かせたことに由来する。その後慶長年間には、蔭田村、田代村、川原村と移り、元和のころに椎の峯へと移動する。そして土井時代（1691～1762）に太郎右衛門、弥二兵衛2人を西の浜坊主町に呼び、のち唐人町に移って焼かせた。しかしこれらの伝承は樵夫、耕民、漁夫らの聞きつたえであるので虚実さだかでないし付記している。

もともと唐津焼の起源は一般には、室町時代に渡来した李朝陶工によってはじめられたとされている。東松浦の岸城域下には飯網窯をはじめ7窯があり、文禄慶長の役以降は松浦、武雄、多久、平戸などを中心に北肥前の全域で焼かれるようになった。容器もはじめは日用雑器であったが、桃山期から江戸初期にかけては茶陶の名品が焼成され、東の瀬戸とともに陶器の代名詞として「唐津もの」と呼ばれるほど盛んであった。

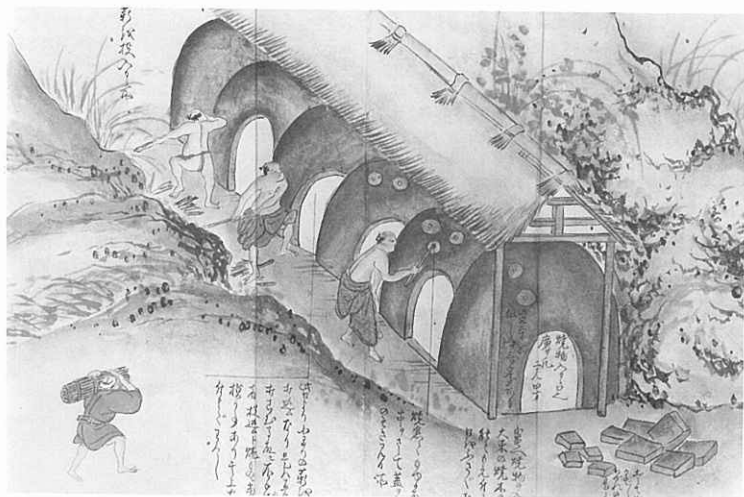
この図考には、雑器類やびん類の製作情景及び窯の火入れの場面が描かれている。前書きに『押川山』にふれているところをみると、東松浦郡相知町にあった『押川がめ』焼きの情景が頭にあって描かれたと思われる。

押川では、このころ石炭といわれる大型のかめ（はんどうがめ）が量産されている。このかめ類は水、酒、しょうゆ、穀類の貯蔵ならびに仕込み用としてもちいられ、『死人がめ』として埋葬用にも使用されていた。

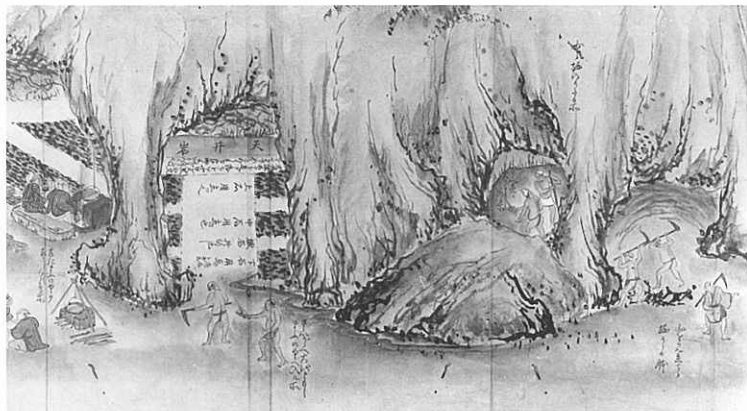
大型であるために一般の製作技法とは違ってろくろを回す人をつくる人と別々である。はじめひも状にした胎土を段つなぎ式に輪積みにし、『シレイ』とか『トツカヒ』とかいうたたき木具をつかって内外からたたきながら積み上げていく方法である。それとともに乾炭を早めるため、外側はたき火により、内側は『火鍋』をつらし積み上げていくなど特殊な工程をとっている。また、ここには登り窯の火入れについて図説している。

押川では、最盛期では職人が30人近くおり、また樵役夫なども60から70人程いたといわれるなど一大陶房として繁栄した。

しかし戦後は、農家の自給自足の経済がくずれ、大型かめ類による貯蔵や仕込みが不必要となり、一方合成樹脂などによる容器の変革でその需要はまったく絶えた。『押川がめ』の系統をひくものに相知では藤田勇氏の横枕窯一窯だけが残っていた。ここでは、宍岐地方の注文で土葬用の『死人がめ』が製作されていた点、全国的にも極めてまれな存在で、旧来の伝承技法をかるうじて見ることが出来たが、この窯も今日では閉窯となった。



10. 採炭、積み出し



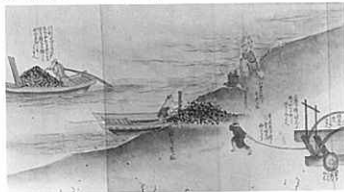
石炭を俗に「五平太」と呼ぶのは、宝永年間（1704～1710）、平戸領高島で百姓の五平太が「燃える石」を発見したことからだといわれる。佐賀県では、享保年間（1716～1735）、東松浦郡北波多村岸山字ドウメキで百姓が耕作中に露頭の石炭を発見したのがそのはじまりと伝えられる。著作者、木崎竹々軒がこの採炭現場を見たのは、これから50年ほど経ったところで、第7帖にあるこの図は当時の岸山の採炭風景と徳須恵川土場の積み出し情景である。

この絵図にみられる石炭の採掘法として、「つるべ掘り」は壁から横に掘っていく方法であり、またそのまま横に掘り進む「走り込み法」があげられている。石炭を掘り当てるまでには、まず天井岩という6尋（1尋は約1.8メートル）ばかりの岩があり、その奥には天井石という塚石がある。これは白色か、褐色で45～46センチの厚さで、「落ち物」と呼ばれて役に立たない。この先に上石という石炭層がある。その次にまた塚石があり、次に中石という石炭層がある。次にまた塚石があり、その奥に下石（底石）という石岩層がある。坑内を「まぶ」とい

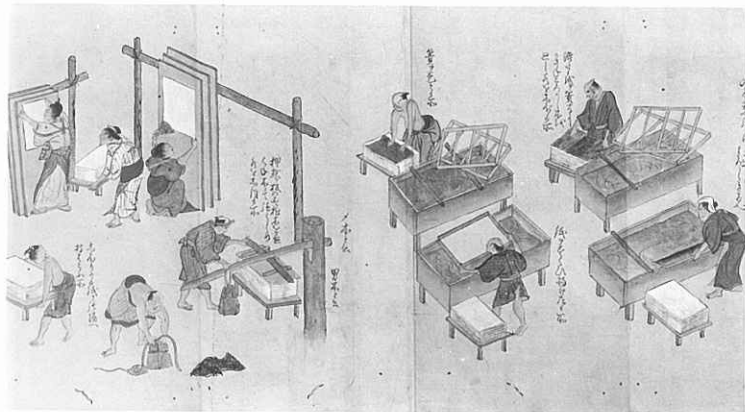
う。サザエの殻に油をともして明かりとする。採炭にあたってはかなりかたい「まつ」とか「こぶ」とかいう岩をツルハシで取り除きながら掘り進む。下り傾斜に掘ると水がたまるので「スホン」というもので排水をする。「まぶ」で掘った石炭は「ずり」という竹カゴに入れ、4輪台車に結んで引きずりだし、抗外でカゴが依に詰めかえ、「土場出し車」に乗せて川岸まで運ぶ。そして土場から川船で下す。なお古い「まぶ」は家の代用ともなり、炭を掘りつくすまで5年から10年位、この仮小屋で過ごすこともあると付記している。

このようなタヌキ掘りで得られた石炭は、初めはマキ代わりであったが、後では製塩業の燃料となり、明治以降は近代産業の原動力として飛躍的に需要が増し、採炭法も変わって企業化する。

埋蔵量に富む唐津炭田は日本有数の炭田の1つであったが、エネルギー革命による時代の趨勢で昭和30年代から衰微の一途をたどり、昭和47年、明治佐賀炭鉱、西杵炭鉱の閉山によって250年に及ぶ石炭の灯は県下から完全に消え去ったのである。



11. 紙すき



九州の和紙の歴史は、筑後の八女郡古川村の福王寺に居をかまえた僧日源が矢部川の清流をみて製紙を思いたち、文禄4年(1595)、郷里の越前五箇からすき手を呼んで製紙の法を伝えたといわれる。

肥前では藩政時代各領内で盛んに行われ、特に唐津藩では早くも大久保時代(1649～1678)に請紙制度が始まり、水野時代(1762～1817)には、紙の専売とコウゾの植え付けが強制され、虹の松原一揆の原因ともなっている。

この第8帖には「紙漉大概」「紙漉諸道具大概」と題して1巻を通してその工程を図説している。それによると、和紙の原料となるコウゾは冬至の前後に刈り取られる。適当な長さにそろえ、蒸しガマで蒸しその後、手ばやく皮をはいで天火で干しあげる。外皮を取るために、川の流れにつけ、踏んだり、もんだりして表皮の黒皮をとる。皮のねばりを取るためには、さらしあげて楮馬にかけて干す。これを白皮といっている。

紙すきの工程は、白皮を半日水にひたし、カマで煮て、灰汁(あく)を入れて漂白し、清流にさらしてアルカリ

分を抜き、木か石のたたき台でたたいて綿のようにつぶしてしまう。これをさらし舟に入れ、粘着剤のオウレン(キンボウゲ科の多年草)を加えてかきまぜ、糞をはめこんだ桁でこの液をすくいあげる。

適量にすくったのが紙の厚さとなるが、このすくい加減が技術を要する。すくいあげられたものは桁だけではずして糞とともに上から木の棒を回して水をしばり、のち糞を巻きとって重ねていく。この際に木の皮か藁をはさんでおく、重ねられたものを紙床といいこれを翌日てんびん式のはね木でさらに強くしめて水を切る。その後張り場に運んで、干し板に1枚ずつ張りつけて干すのである。

このような工程は、極めて手数がかかり、忍耐を要することで、この道で1人前になるには10数年を要するといわれる。

明治以降、洋紙の普及と機械すきの導入にともない必然的に手すきは衰微の一途をたどった。今日県内では、大和の名尾、北波多の稗田、南波多の重橋などの一部にしか和紙の製造は見られない。



12. 鑄物

藩政時代は自給自足が徹底していて、唐津藩が他領から移入していたのは、鉄とあい玉だけであったといわれる。領内での農具その他、鑄物類の製造は唐津市南郊外の大石村丸熊（天神山）と市内の鉄屋の2カ所があり、その資材は郷方農具世話方から1年分の鉄が貸与されるという仕組みであった。

この図考の第5帖でみられる鑄物の製造風景は、コシキといわれる円筒の鑄籠（タクラ）に炭が燃えさかり、そこにタテづくりという柄の長いカギをもった1人が鉄と炭をつぎこみ、また1人はモラシぐちからわきたった鉄を湯汲みでくんで鑄型にそそいでいる。一方、裏方では、6人が足踏みのフイゴ板をふんで送風している。また、鉄滓をとり除くカワヨケやツルハシ、アミナベといった道具も丹念に図示されている。

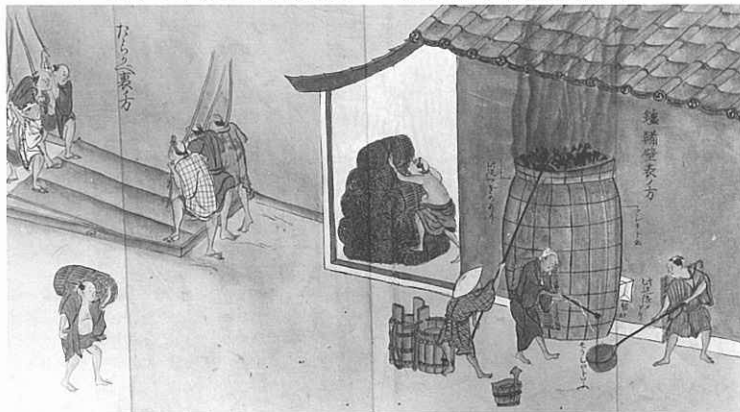
もともと鑄物は古くは紀元前3～4000年以前の古代バビロニア、アッシリア、エジプトで銅、鉄の鑄造が行われており、わが国では約2000年前の弥生時代に青銅器や鉄器が渡来し、太刀、甲冑、馬具、銅鐸、銅剣、銅鐸、鏡などが製造されている。仏教が伝来すると、それにとまなげて造仏工や寺工が渡来し、仏像、梵鐘などの鑄造技術が急速に発達した。奈良時代には典鑄司（いものしのかさ）という職制があり、彼らは特別の保護を受け

てその鑄造にあたった。今日、寺院にみられる金銅仏の逸品は、日本独特の方式による鑄造によるものとされている。

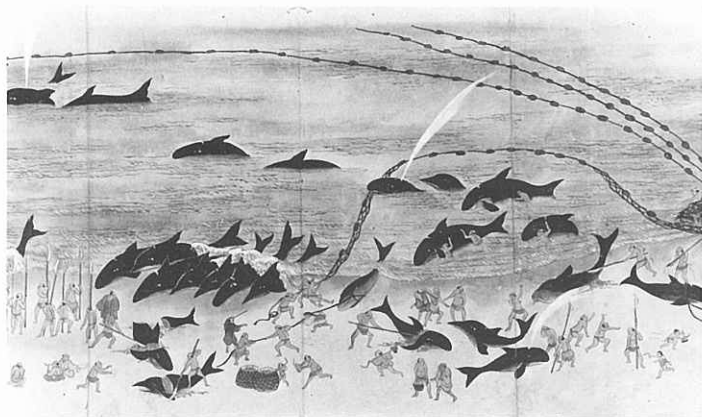
肥前での鑄造の歴史をさぐると、早くは弥生時代から行われていたと考えられる。それを立証するものに久保泉町樫の木や東背振村西石動から出土している弥生期のクリス型銅鐸の鑄造があげられる。古墳時代になると、中原町の古田原、鳥栖市愛宕社東方、東十郎古墳群の石室内から鉄滓が発見され、鉄による諸用具の鑄造を行われていたことを物語っている。平安時代の青銅製の経筒の出土は県下では30余カ所があげられるが、その製造場所はいずれも不明である。

南北朝時代には、「肥前国上松浦山下庄」（場所不詳）で肥前特有の肥前鐘が鑄造されており、また江戸期では農具や武器が広く普及するなかで、刀工の忠吉一門による肥前刀・鑄物師谷口、植木一統による肥前の新鐘（半鐘）、鋳口、懸仏などの鑄造が著名である。そして幕末には、反射炉によって、鉄製大砲の鑄造に成功し、わが国の科学技術の先端をいくことになった。

鑄造技術は文化のバロメーターといわれるが、この図考によって伝統的な技法であるタクラの情景をうかがい知ることが出来るのは極めて興味深い。



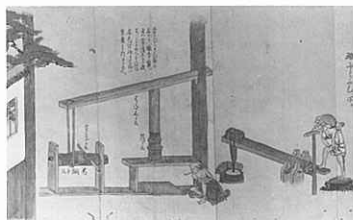
その他



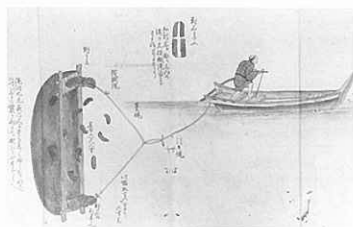
江猪漁事



布晒



線香製



生海鼠粘



掛網

博物館日誌

2月18日	京都大学教授広中平祐氏来館	3月22日	第3回博物館協議会
2月19日	「二科展」終了(総観覧者数25,897名)	3月26日	「古代のくらしのなかの器展」終了(総観覧者数3,978名)
2月20日	「古代のくらしのなかの器展」準備のため休館(25日まで)		国立科学博物館稲木棟夫氏、九州歴史資料館渡辺正気氏、福岡市歴史資料館三島格氏来館
2月24日	九州産業大学教授森貞次郎氏来館	3月27日	日展準備のため休館(31日まで)
2月25日	九州大学教授岡崎敬氏来館	3月31日	「第9回日展」開場式
2月26日	「古代のくらしのなかの器展」開場	4月1日	人事異動
2月27日	沖繩県文化課知念勇氏来館	4月1日	「第9回日展」開場
3月4日	「古代のくらしのなかの器展」記念講演会「古代の生活と器」	4月16日	宮崎県総合博物館黒木孝安氏来館
3月9日	講師 九州産業大学教授 森貞次郎氏	4月20日	鹿児島市立美術館舘生次長来館
3月10日	奈良国立文化財研究所長 坪井清足氏来館	4月21日	熊本市立博物館副館長西岡鉄夫氏、学芸員坂本氏来館
	「古代のくらしのなかの器展」記念講演会「古代の生活」	4月23日	「第9回日展」終了(総観覧者数38,945名)
3月11日	講師 奈良国立文化財研究所長 坪井清足氏	4月24日	「常設展」「レオナルド・ダ・ビンチ展」準備のため休館(5月2日まで)
3月13日	静岡大学教授藤田等氏来館	5月2日	国立科学博物館稲木棟夫氏来館
3月14日	北九州歴史資料館小田富雄氏、武末氏来館	5月3日	前期常設展「佐賀県の歴史と文化展」開場
3月15日	山口県立山口博物館長末富氏、村上係長、別府大学教授賀川光夫氏来館	5月3日	「科学者レオナルド・ダ・ビンチ展」開場
3月15日	九州大学助教西谷正氏、韓国中央博物館考古課長姜仁求氏来館	5月4日	常陸宮殿下、常陸宮妃殿下常設展「佐賀県の歴史と文化展」をご観覧
3月18日	「佐賀大学卒業制作展」開場	5月5日	「こどもの日」常設展観覧無料
3月21日	「佐賀大学卒業制作展」終了(総観覧者数885名)	5月24日	「科学者レオナルド・ダ・ビンチ展」終了(総観覧者数7,223名)
	鹿児島県文化財審議委員河川貞徳氏来館		

行事のお知らせ

修学旅行等の計画に博物館の見学を折り込んで下さい

昭和53年度

	常	設	展
佐賀県の歴史と文化展	5月3日～10月1日 54年 12月3日～3月31日	大・人 大・高生 中・小生	50(30) 30(20) 20(10)

(月曜・祝日の翌日休館) 団体20名以上、()内は団体料金

企			画			展		
展覧会名	会期	観覧料 ()内は団体料金	展覧会名	会期	観覧料 ()内は団体料金	展覧会名	会期	観覧料 ()内は団体料金
七夕書道展	8月1日～8月6日 会期中無休	無料	佐賀県美術展	11月18日～11月26日 会期中無休	大 人 200(150) 大・高生 100(70) 中・小生 50(30)	佐賀県高等学校書道展	11月30日～12月5日 会期中無休	無料
県書作家協会展	8月8日～8月13日 会期中無休	無料	佐賀県学童美術展	12月8日～12月12日 会期中無休	無料	佐賀県高等学校美術展	12月15日～12月20日 会期中無休	無料
九州現代工芸佐賀展	8月19日～8月27日 会期中無休	無料	地下の遺宝展	54年 3月3日～3月25日 会期中無休	大 人 100(80) 大・高生 50(30) 中・小生 30(20)			
理科作品展	9月14日～9月25日 19日休み	無料						
古唐津展 一肥前産の歴史と美を探る一	10月7日～11月5日 会期中無休	大 人 300(200) 大・高生 200(100) 中・小生 100(50)						

会期は都合により変更されることがあります。

●当館発行の図録案内

「古代のくらしのなかの器展」
先般、開催した古代のくらしのなかの器展に伴って
刊行したもので、モノクロ写真約1,000枚を含め257頁。
熊本県下益城郡城南町宮地出土の重要文化財古付舟形土
器をはじめ弥生・古墳時代の土器を、各県ごとに時代別、
遺跡別に分類して掲載している。

博物館報	第41号
発行年月日	昭和53年7月1日
編集者	松崎利彦
発行所	佐賀市内1丁目15-23 佐賀県立博物館
印刷	佐賀印刷社